book

▼今橋映子著『近代日本の美術思想――美術批評家・岩村透とその時代』上・下　A5判　総一五〇四頁・本体各二二〇〇〇円・白水社

ボヘミアン自由主義復権への巨大な紙碑にして歴史的里程標

本書の基本姿勢には、この国における文化行政への根底的批判も見透かされる

稲賀繁美

のちに英文大著*Sandro Botticelli*（1925）の著者として知られる矢代幸雄（1890―1975）は、大学卒業直後に東京美術学校講師に招かれる（1915）。だが登校初日に門を潜ろうとしたところで、いきなり飛び出してきた老人から、ひどい剣幕で叱責される。矢代を学生と間違えて綱紀粛正の挙に及んだこの生徒監は、中国美術研究者・大村西崖（1868―1927）。それまで蛮カラで鳴らしていた校風が一掃されようとしていた。今や禁断となった、ボヘミアンな雰囲気を「仕掛け」てきた扇動教師、啓蒙家こそ、『巴里之美術学生』（1903）の著者、岩村透（1870―1917）に他ならない。

矢代が着任した裏には、その岩村が、前年に美校への復職を却下され退職したという事件が絡まっている。だが、えてして後任者は前任者の行状には通じない。その痕跡は美校の美術史教科書刊行事業や『美術年鑑』編纂にも刻印されている。さらに矢代を含む『白樺』世代と、その前の世代との断絶が相乗される。結果、これまでの日本近代美術史記述は、岩村透の位置づけに困惑し、失敗してきた。

W・ベンヤミンの口吻ではないが、復権は断絶を隠蔽する。復権とは連続性の事後捏造であり、一端途絶した伝統は、顕彰の対象とはならないのだから。

三〇年以上にわたって岩村透の事績発掘に傾注してきた著者は、岩村の忘却が、「近代日本の美術思想」に決定的な空隙を残してきたと主張する。そして丹念かつ執拗な一次資料の発掘から、美術批評の黎明、建築を含む藝術構想、都市景観や美術行政に至る定説の誤謬や無根拠を次々に暴き、封殺されてきた歴史に可能性を見出す。たとえば「国民美術協会」という遺産、総合雑誌『太陽』への岩村の貢献、岩村没後の黒田鵬心らの事業展開……。

以下、若干の羅列にとどまり恐縮だが、岩村透と幸徳秋水とをつなぐ「土佐人脈」から『平民新聞』に至る系譜。岩村のウィリアム・モリス流「社会主義」評価の先駆性と、「小藝術」評価が大正以降の意匠設計に展開する脈絡。さらに雑誌『美術新報』躍進の両輪となった岩村透と坂井犀水との二人三脚（その衣鉢を継損なったのも矢代幸雄と児島喜久雄……）。海外美術情報の収集・最新消息の配信装置としての、岩村の森鷗外との並行性。その岩村は、鷗外の秀麿物「かのやうに」に登場する「綾小路」のモデル――。この事実が見落とされてきた背後には、久しく鷗外を「体制派イデオローグ」と誤認する一方、漱石流「高等遊民」の実態をも捉え損なってきた従来の学説上の欠陥が、表裏一体に摘出される。

「大逆事件」以降、藝術家という「高等遊民」は危険視され、「体制」による言論統制が文部行政にまで浸透する世相が直に反映していた。岩村透の失職事件もその一環だった。

ここで美術の世界に戻るなら、極東の「大逆事件」（1910）はPostimpressionismという用語を倫敦でロジャー・フライが発案した年でもあった。「パンの会」や『白樺』は、挫折した社会改革を藝術上の「革命」へと退却させる保身策でもあり、そこでいわば見捨てられた「時代の犠牲」の片割れに、岩村透の死後の忘却を重ねることも、暴論ではあるまい。存命なら岩村が担ったでもあろう、欧州での松方コレクションの収集は、岩村の後を襲った矢代幸雄らの役割となり、原田マハは、それに着想を得て『美しき愚か者たちのタブロー』（2019）を上梓した。

本書は、これまで謎とされてきた、この岩村の在外研究帰国後の復職却下事件に、かなりの紙幅を割く。当時の文部省・専門学務局長であった松浦鎮次郎を障害の核と見做す仮説展開であり、自由主義者と知られる牧野伸顕も、立場上の発令責任者としての関与は否定できまい。その一方、美学校校長の正木直彦を岩村放逐の元凶とするのも、事実誤認と断ずる。周到かつ概ね妥当な推論と評しうるが、「休職扱い」の慣例を巧みに利用して「復職」不認可の判断を下す巧緻は、官僚組織には通弊の常道ではあるまいか。この手管を根拠に、岩村事件を澤柳事件や瀧川事件に連なる「自由思想弾圧」の「前史」と見做す解釈には、評者としては、なお簡単には同意できない。

岩村退任後を襲った矢代幸雄も、詔勅誤読を所内から指弾され、対米英戦争勃発直後に美術研究所の所長の職から追い落とされる。上野の美術研究所は、岩村の盟友だった黒田清輝の遺産で発足した機関だが、矢代の辞職には、温和で冷静な牧野も激昂したと伝えられる。黒田清輝は晩年、貴族院議員となるが、藝術家連中の騒擾に比べれば、貴族院議員の扱いなど容易いものだ、と嘯いてもいた。権力中枢での暗闘は極めて淫靡であり、そこにはなお探求の余地が残るだろう。顧みれば、東京美術学校初代校長の岡倉覚三も、学内の内紛が醜聞を招き、「非職」扱いで罷免されたことが思い起こされる。

本書には優に千名を超える膨大な数の固有名詞が登場し、その丁寧な扱いには感嘆のほかない。前人未到の達成だが、ここまで視野が広がると、すべてを網羅しようにも、方法的臨界に達する。例えば*Studio*に寄稿している「原田治郎」（上巻：568頁）とは誰か？　北米で博士号を取得した庭園研究者（1878―1963）、敗戦後は東京国立博物館に勤務し、桑港講和条約記念の北米美術展覧会ほかの事務を担った英語通のはず。本書の水面下にはなお多くの錯綜が潜む。と同時に、本書の基本姿勢には、この国における文化行政への根底的批判も見透かされる。

（京都精華大学教員）